

アムスルだより

No. 62 2003年 7月10日



Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。http://www.amsl.or.jp

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



きのこサンゴの成長

ークサビライシの仲間 その1ー

みなさんもお存じのとおり、慶良間の海にはたくさんのサンゴがすんでいます。枝状のものやテーブル状のもの、ドーム型のものや岩の上で平たく張り付くように生きているものなど、その形も様々です。研究所で調べて名前がわかったものだけでも約250種あり、これからもっと調べればさらに多くの種が見つかるでしょう。そうしたサンゴのほとんどは、海底の岩の上にしっかりとくっついて生きていますが、あるグループのサンゴは岩からはなれ、どこにもくっつかずに生活しています。今回は、その変わった生き方をしているサンゴを紹介しましょう。

そのサンゴの名前は、クサビライシといいます。阿嘉島周辺からは、これまでに23種類のクサビライシの仲間が見つかっていて、代表的な種類はマルクサビライシです。この種は、横から見ると平べったい形をしています。

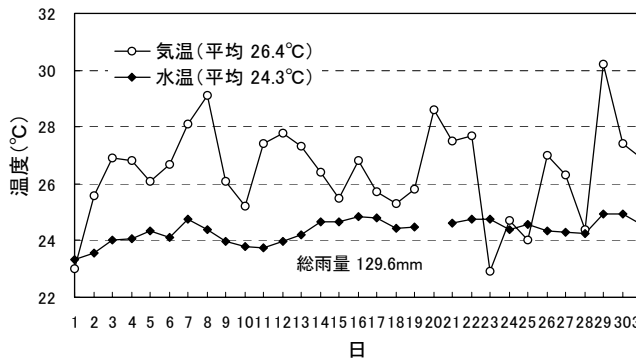
すが、上から見るとまん丸で、放射状にひだのような骨格があり、ちょうどシイタケの傘^{かさ}を下から見たような感じです。この見た目のせいでしょう、クサビライシは英語ではマッシュルーム・コーラル（きのこのようなサンゴ）と呼ばれています。実は、和名の「クサビラ」も日本の古い言葉（古語）で、“きのこ”を意味していて、やっぱり「きのこサンゴ」ということなのです。

阿嘉島で見かけるマルクサビライシは、直径10~15cmのものが多いのですが、大きいものでは25cm以上に成長します。クシバルの礁池の中にすむものを調べてみたところ、最も速いものでも1年間で2.8cmくらいしか成長しないので、25cm以上のものは、きっと10年以上生きているのでしょう。

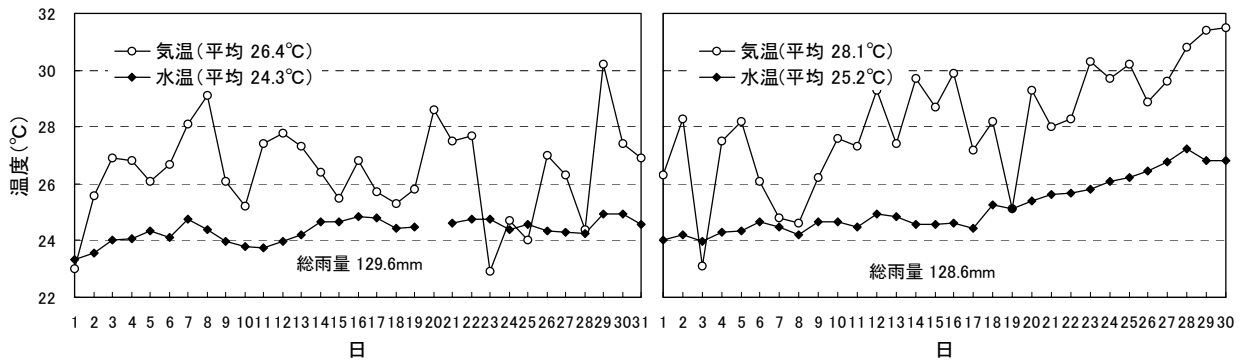
クサビライシの仲間は、いろんなところにすんでいて、海中の岩の上やすき間、時には砂の上に転がっているのをわりと簡単に見つけることができます。岩にくっついていませんから、採集するもの簡単です。ところが、実は、このクサビライシたちも最初から岩からはなれてくらしているわけではありません。クサビライシの赤ん坊のプラヌラ幼生は、ほかのサンゴと同じように岩にくっついて成長し、細い柄^えの先端^{かさ}に傘を広げた形、それこそ“きのこ”のような姿になります。傘^{かさ}の部分はさらに成長して大きくなり、やがて柄からはなれて、海底に転がる生活を始めるのです。柄からはなれるのは、1.5~2.5cmくら

定点観測

2003年5月



2003年6月



いになった頃のように、このサイズのクサビライシの裏には、柄にくっついていた跡がはっきりと残っています（成長とともにその跡はなくなっていきます）。

先ほど、プラヌラ幼生の話をしました、クサビライシには、オスとメスがあり（ミドリイシなどは1つのサンゴが両方の性をもっています）、それぞれから精子と卵が放たれて受精が起きると考えられていますが、まだ十分に研究されているわけではありません。研究所でも、まだ3回くらいしか、その産卵は確認されていません（1回は水槽で観察されたものです）。いずれも7月に放卵や放精が見られているので、今年もこの月に繁殖するだろうと予想しています。もし、今年（またはこれまでに）その様子を見かけた人がいたら、ぜひ教えて下さい。

クサビライシは、ユニークな生き方をしているサンゴです。またいずれ今回お話しできなかった話題をご紹介しますと思います。

● 阿嘉島の海より

—南の島パラオからの研修生—

太平洋戦争の前、ミクロネシアのパラオ諸島は日本政府が統治していて、コロール島には南洋庁が置かれていました。そしてそこには沖縄から多くの人々が移り住んで、カツオ漁や真珠の養殖の仕事をしていました。戦後、パラオは米国の統治下にありましたが、現在は独立して、ベラウ共和国になっていま

す。

パラオはマングローブ林とサンゴ礁に囲まれた美しい島々からなる熱帯の国で、毎年日本からも多くの観光客が訪れています。その多くはすばらしいサンゴ礁でのダイビングを楽しむ人びとですから、阿嘉島に似ています。島の宝である大切なサンゴ礁を保護し、サンゴの研究を行うために、2001年、日本政府の援助で、この地にパラオ国際サンゴ礁センターが設立されました。このセンターには研究施設だけでなく、魅力的な水族館もあり、たくさんの人々が見に行っています。阿嘉島臨海研究所はパラオ国際サンゴ礁センターの設立と同時に研究協力協定を結び、センターとの人物交流や情報交換を通じてサンゴ礁の保全と研究のために共に努力しています。

4月4-6日、国際協力事業団の招きで来日していた、パラオ国際サンゴ礁センター研究員のイデップ・デヴィットさんが阿嘉島臨海研究所に研修に訪れました。イデップさんには沖縄人の血が流れていて、祖父はシラドという本島の人だったそうです。阿嘉島にもかつて、パラオやヤルートなどの熱帯の島で暮らしたことがある方が何人もおられます。イデップさんは阿嘉島が好きになり、研究所での滞在中、兼島キクさんや金城初子さんを訪ねて昔と今のパラオのはなしをしあって、楽しいひとときを過ごしました。みなさんもパラオを訪ねたときには、パラオ国際サンゴ礁センターに是非立ち寄ってみて下さい。